

あんざんきとうずもつ
安産祈禱相撲

— 中村 —

江戸時代のことです。

徳川家康はこう言いました。

「村々の百姓が死なないように、また、生きないように考えて年貢を取り立てるように。」

と、つまり、農民に耕作ができるだけの暮らしをさせて、できるだけたくさんの年貢を取り立てるように、と言ったのです。ですから、その頃の農民はたいへん苦しい生活を送っていました。

けれども、村人たちにも楽しいことはありました。お宮のお祭りや相撲を取ることです。そんな日は、お酒を飲んだり踊ったり、苦しい生活の中にも希望をもって楽しんでいました。

中村でも陽珠院の境内で村の若者が相撲を取っていました。自分たちで立派な土俵をつくり、四本柱を立てそれに紅白の布を巻き……それは盛んに行なわれていました。

ところが、そんな村人の姿を藩の役人が見て、

「農民が遊びすぎて耕作をなまけ、年貢が取れなくなる。」
と言って村人たちの唯一の楽しみであった相撲をやめさせてしまったのです。





そのため、村はすっかり活気をなくしてしまいました。

ある日、村の妊婦が難産でとても苦しみ亡なってしまいました。
それからというもの、不思議なことに難産で苦しむ人が続き、
村人たちは、すっかり怖がりました。

しかし、

「これでは子孫が絶えてしまう。」

「こんな時こそ立ち上がらなければ……。」

と奉納相撲を取ったのでした。

そうして、祈禱をうけてからは、安産が続いたということです。

「相撲取りのように、丈夫な子が生まれますように」

と人々の願いは江戸時代から長い歴史を作り、今も八月二十三日、
下御糸小学校の児童が、立派にあとを継いでいます。



キーワード：みんな、中村、相撲、陽珠院、お祭

このお話は、昭和56年に発行された書籍『明和のみんな』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしょうしています。